

## CLP 規則の追加 Q&A (2017 年 11 月)

2017 年 11 月 28 日

山本 毅

2017 年 11 月 21 日に EHCA の Q&A web サイトにおいて、CLP 規則の新しい Q&A[1456]が追加されました。混合物のエアロゾルの分類における高圧ガスの扱いに関する Q&A です。その原文と仮和訳を以下に紹介します。

(原文)

[1456] When deciding on the classification of aerosol mixtures concerning health and environmental effects, does the propellant have to be excluded?

Yes, the propellant has to be excluded, provided that it does not affect the hazardous properties of the aerosol mixture and there is scientific evidence available that shows the aerosolised form is not more hazardous than the non-aerosolised form.

The aerosol bridging principle, set out in Annex 1.1.3.7, requires the aerosol form of a mixture to be classified in the same hazard category as the non-aerosol form of a tested mixture. The bridging principle does not apply to the CMR hazard classes.

However, a similar approach should generally be used where methods, other than bridging principles, are applied for the classification of mixtures, especially for mixtures containing CMR substances. Where the calculation method includes the propellant, this results in a dilution effect of CMR substances, which is not in line with the general approach taken in CLP concerning CMR substances in mixtures. Further, this would not reflect the actual hazards of the mixture, as it is placed on the market, since the propellant normally evaporates.

It is therefore recommended to exclude the propellant for the identification of health and environmental hazards of aerosols provided that it does not affect the hazardous properties of the aerosol.

In practice, this means that, for example, when considering the classification of an aerosol, where the non-aerosolised form of a mixture contains 1.2 % of a carcinogen (Carc. cat. 2), this should be included in the classification of the aerosol regardless of the amount of propellant added. So, where a mixture consists of 33 % propellant and 67 % non-aerosolised form, which nominally would bring down the concentration of the carcinogen to 0.8 %, the mixture would still be classified.

Modified Date: 21/11/2017

Topic: CLP

Scope: Classification

ID: 1456

Version: 1.0

This answer has been agreed with national helpdesks.

(仮訳)

[1456] エアロゾル混合物の人健康及び環境影響に関する分類を決定する場合、その高圧ガスは排除されなくてはならないか？

そうである。それがエアロゾル混合物の有害な特性に影響を与えず、そのエアロゾル化された形態が非エアロゾル化された形態よりも有害でないことを示す科学的証拠が利用可能であるという条件で、その高圧ガスは排除されなくてはならない。

附属書 1.1.3.7 において規定されているエアロゾルのつなぎの原則は、混合物のエアロゾル形態が試験された混合物の非エアロゾル形態と同じハザードテゴリーで分類されることを要求している。このつなぎの原則は **CMR** のハザードクラスには適用されない。

しかしながら、つなぎの原則以外の手法が、混合物の分類、特に **CMR** 物質を含有する混合物に対して適用される場合は、一般的に、同様なやり方が使用されるべきである。計算手法に高圧ガスが含まれる場合、それは **CMR** 物質を希釈する結果となり、それは混合物中の **CMR** 物質に関して **CLP** において取られる一般的なやり方と一致しない。更に、これは、上市される時のその混合物の実際のハザードを反映しない。その高圧ガスは通常、蒸発するからである。

それ故、それがそのエアロゾルの有害性特性に影響しないという条件で、エアロゾルの人健康及び環境ハザードの特定に対して高圧ガスを排除することが推奨される。

実際的には、このことは、例えば、エアロゾルの分類を検討する際に、その混合物の非エアロゾル形態が発がん性物質(発がん性 cat.2)を 1.2%含有する場合、添加された高圧ガスの量に関わらず、それがそのエアロゾルの分類に含まれるべきであることを意味する。

それで、混合物が高圧ガスが 33%、非エアロゾル化された形態が 67%で構成されていて、それがその発がん性物質の濃度を名目上は、0.8%まで下げることになる場合でも、その混合物はそれでもやはり分類されることになる。

上記翻訳は原文の内容を正確に反映するように努力いたしましたが、疑義がある場合、正確な解釈については、原文でご確認ください。

原本の情報源：Source: European Chemicals Agency, <http://echa.europa.eu/>

Questions and Answers

<http://echa.europa.eu/support/qas-support/qas>

上記の翻訳は、ウェブサイト：<http://echa.europa.eu/>で見出される欧州化学品庁によって公表された正本の Q&A の実用上の翻訳(working translation)である。

本情報の内容は、ECHA の Q&A の内容に基づいておりますが、ご利用者が本情報を使用して行う一切の行為について、著者並びに発行元は、何ら責任を負うものではありませんことをお断りしておきます。また、いかなる場合においても、著者並びに発行元はご利用者が本情報を使用して被った損害、損失について、何ら責任を負いません。

以上